

平成30年度 小城市立小中一貫校芦刈観瀾校 学校評価結果

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標	
ふるさとを愛し、未来を拓く、心身ともに元気な子どもの育成 ～「ともに」「つなぐ」小中一貫教育～	子どもの夢をはぐくむ 小中一貫教育の充実	① 学力向上 ② 豊かな心の育成 ③ 基本的な生活習慣の確立と体力の向上 ④ 小中一貫教育の推進 ⑤ 生徒指導体制の確立 ⑥ 保護者・地域連携の推進 ⑦ 子どもたちの多様な体験活動時間確保のため働き方改革に沿った学校業務の改善

達成度
 A: ほぼ達成できた
 B: 概ね達成できた
 C: やや不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標

3 目標・評価

① 学力向上							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○授業力向上	・小中一貫した系統性のある指導方法の研究	・「学力向上のため授業を充実させたり、指導方法を工夫したりしている」の項目の職員の達成率を85%以上にする。	・9年間を「つなぐ」教育活動の研究を小中教職員が教科を軸として「ともに」磨きあう部会体制を一層充実させ、今年度のグループ授業研の実践を日常的に取り入れると共に、本時のめあて達成につなげ、生きる力を育む教育活動を行う。 ・昨年度から取り組んでいる「書く活動」を教科ごとにさらに整理し、研究の検証方法、客観的評価の方法を確立していく。	A	本年度は、「書く活動」をより充実させた形で、授業に取り入れた授業研究が盛んに行うことができた。更に、特別支援教育の視点や、健康教育の視点を取り入れた、授業研究を行うことによって、児童・生徒に生きる力を育むための教育活動を仕組むことができた。また、職員の評価は、「よくできている」が57%で、「だいたいできている」が43%と、達成度が85%以上の目標を実現できた。	「芦刈メソッド」などの9年間を貫く教育活動の研究や、「書く活動」を効果的に取り入れた授業研究などを土台に、より確かな学力を身につけさせるために、小学部は理科における指導法の研究を、中学部は各教科の主体的・対話的な学びの指導法の研究を、特化して進める。
教育活動	●学力向上	・学力向上対策	・県及び全国学習状況調査において、県平均を上回る。	・県及び全国学習状況調査「4月調査」の課題を分析し、[12月調査]までに課題を解消する取組を計画的、継続的に行う。 ・補充学習を強化し、基礎基本がきちんと身に付くように、単元毎の習熟プリント等を使って着実に理解できるようにする。 ・小中一貫による9年間を見通した教育活動を充実し、「なぜ勉強するのか」等、進路学習やキャリア教育にも力を入れていく。	B	・どの教科においても、学習目標とまとめをリンクして提示し、児童生徒のふり返り確認するように全職員で授業スタイルを確立させるように努めている。 ・12月実施の評価テストにおいては、小学部では全体的に県平均と同等か下回る結果となった。しかし、4月調査に比べると、国語も理科も伸びてきている。中学部では、数学がやや下回ったものの、他の教科においては県平均と同等か大きく上回る教科もあった。	・個に応じた適切な指導を積極的に行い、学習意欲の喚起、学習の仕方についてアドバイスし、家庭学習の定着を図っていく。 ・基礎基本がきちんと身に付くように、単元毎の習熟プリント等を使って着実に理解できるようにする。 ・今後も小中一貫による9年間を見通した教育活動を充実し、「なぜ勉強するのか」等、進路学習やキャリア教育にも力を入れていく。
教育活動	○学習環境の充実	・家庭学習及び学習規律の充実	・「朝の学習や家庭学習によく取り組んでいる」という項目の児童生徒の達成率を全学年とも80%以上にする。	・「家庭学習の手引き」を作成・配布し、強化週間等により、保護者と共に児童生徒の家庭学習への意識改革を図る。 ・小学部は、「朝の時間」の活用を図り、スピーチや計算、漢字、読書時間を設定し、全職員で取り組む。 ・中学部は、確実に朝の読書時間を確保していくよう努める。 ・9年間を通した「芦刈観瀾校学習規律表」をもとに、基本的な学習習慣の定着をはかる。	B	<成果> 朝の学習(スピーチタイム、すぐくタイム、読書)に主体的に取り組む子どもが多かった。また、授業開始時刻を大切にする姿が見られた。 <課題> 課題(宿題)への取組	キャリア教育の充実を図り、児童生徒が学ぶ意義や意味を見出し、主体的に学ぶに向かうよう努める。 また、授業内容と関連性が強い宿題を出すなど、学校と家庭での学びがつながるような工夫を行う。

教育活動	○読書教育	・読書活動の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館年間1人当たり貸出数目標を小学部低学年120冊以上、中学年100冊以上、高学年80冊以上、中学部15冊以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読書を推進する活動(読書マラソン、図書館まつり、読書週間等)を充実させる。 ・読書傾向に偏りが生じないよう、発達段階に応じた本の紹介をする等啓発に努める。 ・朝読書等を通して、中学部生徒の読書に対する関心を高める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・年間1人当たり貸出数の数値目標は達成することができた。 ・図書館のディスプレイやPOP、委員会による本の紹介等で読書の啓発に努めることはできたが、児童生徒は、読書によく取り組んでいるという意識が低い。個人差が大きいことが原因。(約40%が「できていない・あまりできていない」と回答) ・中学部の朝読書は毎日どのクラスも行っているが、制限や条件をつけていないので、選書にはかなりの偏りが見られる。図書館の本ではなく、自宅から持ってきたり公立図書館で借りたりしているものを読んでいる生徒が多い。 	
② 豊かな心の育成							
教育活動	●心の教育	・豊かな心の育成	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分は、命を大切にしたい」という項目の児童生徒の達成率を5%にする。 ・QUテストの学級満足群の割合が、1回目実施より2回目実施が高くなるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人と人との関わり(つながり)を大切に、児童生徒の温かなやさしい気持ち、感謝の気持ちを育むことができるよう、人権集会や道徳の授業の中で、子どもたちの実態に応じて自分の行動を振り返る機会を設ける。 ・1学期のQUテストの結果をもとに児童生徒の実態を把握し、2学期からの学級、学年経営に生かす。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 〈成果〉 「自分は、命を大切にしたい」という項目の児童生徒の達成率は92%であり、目標の85%を大幅に上回った。 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き、人権学習や道徳の学習において、児童生徒の実態に応じた学習活動を仕組み、自己をふり返らせたり、自己や友達によさに気付かせたりする。 また、家庭への連絡を密にし、家庭と児童生徒の様子などについて共通理解し、学校と家庭の両方で、心の教育を助めていける工夫を行う。
③ 基本的な生活習慣の確立と体力の向上							
教育活動	●健康・体づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・健康教育、安全教育の推進 ・食育の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・健康、安全に係る教育活動の充実を図る。 ・児童生徒に食事の重要性、食事のマナー、感謝する心等を身につけさせるための教育的実践を図る。 ・「食育、健康・安全教育の充実」の項目の児童生徒及び保護者、職員達成率を80%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小中の発達段階に考慮し、外部講師等を活用した防煙教育、性教育、薬物乱用防止等の授業、講話、講演会等を計画を見直す。 ・衛生面での意識を高めるため、生活衛生チェックを継続的に行い、基本的な生活習慣の向上を図る。 ・全職員共通理解のもと給食指導を行い、食に対するマナーや意識の向上を図る。 ・栄養教諭と連携し、児童生徒に食に関する指導や保護者への啓発(広報活動、給食試食会など)を推進する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・小学部中学部ともに健康で安全に生活している実感を感じることができている。 ・小学部のがん教育授業発表に向けて、小中の授業の関連や健康教育への認識を統一することができた。 ・食育においては、児童生徒及び保護者、職員の達成度を80%以上にすることができた。全職員で給食指導に取り組めた。 ・栄養教諭と担任が連携し、食に関する指導もでき、試食会・授業参観、食育だより等で保護者への啓発もできた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小中統一した健康カードの取り組みを今後も進めていく。また、衛生チェックの習慣化ができてきているので継続して行う。 ・引き続き達成度を80%以上になるよう、学級担任等と連携し、食に関する指導を行い、日々の給食指導も全職員で取り組んでいく。 ・給食試食会や授業参観での食育の授業、食育だより等で保護者にもさらなる啓発に努める。

④ 小中一貫教育の推進						
学校運営	○小中一貫教育	・9年間をつなぐ教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・9年間を見通した小中一貫教育について、全教職員で強く押し進め成果を上げていく体制を整備する。 ・「小中一貫による9年間の教育活動を充実させていると思う」の項目の保護者の達成率を70%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科部会において、9年間で身につけるべき学力の要素を把握し、9年間での学びについての基本的な考え方や方法を検討しながら、小中一貫教科カリキュラムに沿って授業を改善していく意識や実践力を持つ。 ・小城市教育におけ小中一貫教育への期待を受け、毎年11月に公開授業を行い、成果と課題、課題解決に向けての情報交流を行う。 ・特別活動計画(児童会・生徒会)について、「つなぐ」視点から、小中一貫教育を見通した取り組みを工夫する。 ・9年間を見通した特別支援教育の推進を図り、全職員がチームの意識を持ち、特別支援教育コーディネーターを軸とした研修に取り組み、特別支援教育のスタンダード化をはかる。 ・小から中、中から小への職員による交流授業や学年及び異学年職員による授業交換や授業検討会等を取り入れ、小中の連携を図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・小中一貫教科カリキュラムに沿って授業改善していく意識をもって実践を重ねたが、小中で各教科別の改善点等について意見交換する機会を十分に持つことができなかった。 ・11月小城市教育委員会研究指定小中一貫教育研究発表会を開催し、公開授業を通して研究成果と課題を情報交換することができた。 ・儀式的行事や体育大会では例年通り9学年が一緒になって活動してきた。昨年度からは、文化発表会にも全学年が参加し、内容も成長段階に即した充実した活動になった。また、生徒会が提案した「教えあいの活動はもとより、小中学校の様々な学年において異学年交流活動が行われ、児童・生徒はそれぞれの役割に責任をもって取り組んだ。とりわけ、9年生は全校のリーダーとしての活躍ぶりは、憧れの存在となっている。 ・「小中一貫による9年間の教育活動を充実させていると思う」の項目の保護者アンケート達成率90%である。児童・生徒アンケート項目「学校は、小学生と中学生が仲良く学び、活動していると思う」では、達成率78%であった。 ・小中連携したTTIについては、体育科で実施することができた。また、引き続き美術科、音楽科、国語科(書写)で中から小への乗り入れ授業を実施した。また、特別活動の授業研究については9年間のつながりを意識した連携した研究に取り組むことができた。
⑤ 生徒指導体制の確立						
教育活動	●いじめの問題への対応	・いじめの未然防止、早期発見、早期対応及び再発防止	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒のいじめ防止に対する意識を高め、いじめを許さない学校風土を定着させる。 ・「いじめをなくすようにしていると思う」の項目で、児童生徒及び保護者の達成率を80%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本校のいじめ防止基本方針に沿い「いじめの問題に関する点検項目」に基づいて定期的に自己点検を行い、いじめ問題の対応について改善充実を図る。 ・あいさつやふれあいを大切にすることを全教育活動で推進・実践し、すべての児童生徒及び教職員、保護者、地域の方々と心をつなぐ場面を数多く創る。 ・人と人との関わり(つながり)を大切に、児童生徒の温かなやさしい気持ち、感謝の気持ちを育むことができるよう、全教育活動を通して学校行事や道徳、学級活動等の授業と関連させながら、小中全教職員で人権教育・特別支援教育の視点に立って指導していく。 ・毎月10日の小城市「いじめ防止、心を考える日」の取組(アンケート、集会活動、人権教室、命の授業等)を、人権・同和教育や教育相談、生徒指導の年間計画と関連させ、計画的に実践し積極的に関係機関及び外部講師の協力を得ながら児童生徒の心を育てる。 ・人権・同和教育の視点に立ち、望ましい人間関係育む「道徳」学習の実践(35時間) 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月10日の小城市「いじめ防止、心を考える日」に合わせて、なかよしアンケートの実施や教育相談体制の確立を図ることで、いじめに対する意識が高まり、一人ひとりがいじめを許さない風潮がさらに広がっていった。 ・「いじめをなくすようにしていると思う」の項目では、児童生徒の達成率が85%、保護者の達成率が86%となり、80%以上の目標を達成することができた。 ・なかよしアンケートを通して、個別相談の回数を増やす。きちんと時間を確保した教育相談の時間だけでなく、普段からアンテナを張り、子ども達に困り感がないか確認していく。そして、子ども達も気軽に相談できる雰囲気をつくっていく。 ・学校、家庭、地域が連絡を密にして、いじめの兆候を見逃さないようにする。

教育活動	○自己肯定感を高める生徒指導体制及び教育相談体制(不適応・不登校対応)	・不適応及び不登校の解消	・発達段階に応じた生徒指導及び教育相談を充実させる。 ・不適応、不登校及び不登校傾向のある児童生徒に対する情報を共有し、段階的な支援が行える体制を整え、不登校児童生徒数の増加を押さえる。	・全児童・生徒に対する教育相談を年間2回以上実施する。 ・生徒指導協議会や小中の連絡会等で情報を共有し、組織的な対応につなげていく。 ・不適応・不登校児童生徒の対応については、必要に応じて関係機関等に効果的につなぎ、連携の充実を図る。 ・スクールカウンセラー、スクールサポーター、心の教室相談員との連携を強化し、生徒の心の安定を図る。	B	・教育相談を6月と11月に実施することで、児童生徒の思いを知る機会になった。 ・生徒指導協議会や小中の連絡会等で児童・生徒の様子について情報を共有する時間を設けたことで、全職員の共通理解のもと、支援に当たることができた。 ・児童生徒や保護者が、スクールカウンセラーと関わる機会をもつことができ、よりよい支援の方法を考えていくことができた。	・不適応、不登校及び不登校傾向のある児童生徒の心がより安定する方法を、職員や関係機関が、情報を共有しながら、共通理解のもとで支援に当たっていく必要がある。
------	-------------------------------------	--------------	--	--	---	---	---

⑥ 保護者・地域連携の推進

学校運営	○各種連携	・保護者及び地域等との連携の強化	・学校ボランティア参加人数を、のべ400人以上にする。 ・学校の情報発信に対する保護者の達成率を70%以上にする。	・「あしかり学」を中心に地域との連携を強化する。また地域ボランティアの支援活動実施後に、アンケートを実施し、改善点を把握する。 ・地域連携コーディネーター及び声刈観瀾校配置の地域連携担当による定期的な協議の時間を設定し、より効果的な取組となるよう工夫改善するとともに、学校だよりやホームページ等に積極的に情報を発信する。また、PTAと協働する等して保護者との連携を一層強化する。 ・地域連携担当を中心に各学年の「あしのご学習」の記録を整理し、総合的な学習の時間の全体計画等について、9年間を見通した充実した内容となるようさらに見直しを図る。	A	・学校ボランティア参加人数については、のべ300人以上となり目標を達成することができた。「あしのご学習」を中心に地域と連携した学習が定着している。 ・学校の情報発信などによる地域連携については、保護者の達成率が70%以上となった。授業参観やPTA活動にも参加意識は高まった。	・地域や家庭との連携についてはいろいろな取り組みをした成果として一定の向上が見られた。 ・情報モラル等を含め児童生徒をより安全な環境で育てる意味でも、関係団体と協働した行事や取り組みを進めながら、連携の強化を進める必要がある。 ・小学部の「あしのご学習」だけでなくとどまらず、中学部においても総合的な学習の活動記録を整理し、計画的に進めていく必要がある。
------	-------	------------------	--	--	---	--	---

⑦ 子どもたちの多様な体験活動時間の確保のため働き方改革に沿った学校業務の改善

学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・校務の効率化の推進	・各分掌間の連携及び情報共有を図り、効率的な業務への取り組みを推進するとともに、教職員の時間外勤務について前年比一月当たり10%削減する。	・校務サーバー上の各分掌が情報を共有しやすいように、フォルダ構成を整理する。 ・各教職員の勤務時間を把握し、特定の教職員に業務が集中しないようにマネジメントを行う。 ・小城市統一の部活動休業日(第3週日曜日)含む平日4日、土日4日の部活動休業日を設定し、確実に実行する。	C	学級数や職員数の急激な変化に対応し、児童生徒への教育内容を一定基準に保つためには、校内研究や配慮を要する児童生徒への共通理解を図る時間が必要で、業務時間が増えた。情報共有や会議の簡素化も一定の効果があったが、それよりも増加時間が上回ることとなった。教育内容はより豊かになったが、職員の業務改善上は、効をなさなかった。	来年度は、業務量として軽減される見込みはないので、管理職を含む全職員で、業務の分担を見直し、自発的残業時間の合理化を図る。早く帰ることができない理由を明確にし、仕事を減らすときは何かを減らす考えを、管理職が指導力を発揮しながら、全体で共有する。現状としては軽減目標が立てにくい状況にあり、現状維持を目指して業務の効率化を図る。
------	--------------------	------------	---	---	---	--	---

4 本年度のまとめ・次年度の取組

本校は、小中一貫校として、9年間の「学び」と「育ち」をつなぐ教育活動の充実を重点目標として学校経営に取り組んできた。開校6年目を迎え、小中の文化の垣根を越えた職員集団の協働意識がさらに高まり、「共に学び・共に考え・共に創る」学校風土の実現に向けた成果が見られた。静かで落ち着いた学習環境、主体的に学ぶ児童生徒の様子、小中職員の授業展開や指導方法に一貫性があることは、小中一貫教育の成果の現れとして、高い評価を得ている。このことは、「書く活動」を軸とした主体的・対話的で深い学びの実現をめざし、小中職員が共に学び合う校内研究の充実が背景としてある。また、長年に渡る地域ボランティアの活用は本校の特色の一つとなっており、地域の教育力を取り込みながら教育活動の充実を図ることができている。生徒指導、心の教育、健康・体づくり、食育等においても各担当を中心に組織的に取り組み、全職員による共通理解と共通実践のもと多くの成果が見られ、児童生徒、保護者からも高評価であった。一方で、学力向上、不登校への対応、家庭での学習習慣・生活習慣の定着などの課題が残る。また、今年度新たに評価項目に入った「業務改善・教職員の働き方改革の推進」については、多くの業務見直しが行われたが、それを上回る業務の増加により現実的には労働時間の短縮には結びつかなかった。今後、「地域に開かれた教育課程」の理念のもと、一層の学校・家庭・地域との積極的な連携、協働を進めていくとともに、学校の組織的取組を強化し、児童生徒や保護者の信頼度を上げると共に、業務改革を行い働きやすい職場づくも目指していく。

●は共通評価項目、○は独自評価項目